

デアル

さる年のさるを惜んで人真似て書いては見たがどんなモンキー

(エヘン、牧野申サク、ソレガ後レテ申ノ年ヲ去ル(變ダナ)シテシマイマシタノデ、トリ(酉)オイタ年ノ始メノ第八號ニ掲ゲマツル事依テ如件、ハイ、)オットマダだいじナ事ヲ忘レテキタ、もんきーの花語原ノいさかい、ドツチニモ一理アレバ此處ハ御兩人ニ花ヲ持タスガ行司ノ役目、氣色バンダ眼ノ色モソレデをだやかニモドルデアラウ、何ンデモ仲裁人ハ萬事此呼吸ヲ忘レマイゾトさる人言ッテタガコレハ内證))

○斷枝片葉 (其六十)

牧野 富太郎

●あぶらぎくノ語原

あぶらぎくハ油菊ノ意デアル即チ其花ヲ油ニ蘸タシ其油ヲ藥用シタノデ其レデ油菊ノ名ガ出タモノデアル、頃日發行ニナツタ大槻文彦博士著ノ『大言海』ニ其語原トシテ「黃色ナルニツキテノ名ニモアルカ」ト著者ノ臆想ガ書イテアルノヲ見ルト流石領學ノ同博士モ此油菊ノ語原ヲバ能ク索メ得ラレナカッタト見エル、此油漬ノ事ハ徳川時代ニ肥前ノ長崎デノ處方デ多分蘭人カラデモ聞テ行フタモノデハナイカト思ハレル、然レバ其菊ハ何デアッタカト云フト其レハ *Chrysanthemum indicum* L. デアッテ此品ハ長崎附近ノ山地ニハ極メテ普通ニ見ラル、品デアル、今日ハ右ノ蘸油ノ事ハ廢レテキル様ダガ然シ右ノ菊花ヲ採リ集メ來テ之レヲ乾カシ茶枕ノ代リニスル事ハアル、此枕ハ香氣ガアツテ頭ヲ鎮メルナドニ妙デアルトノ事デアル、上ノ油ニ蘸タス事實ハ今カラ百三十三年前ノ寛政十二年版ノ廣川獬著『長崎聞見錄』卷ノ一ニ「崎陽ノ野菊」ト題シテ下ノ記事ガアル、即チ「崎陽の俗野菊といふ。秋の比花を取りて油にひたし。諸種痛諸瘡に傳る。此菊餘國に稱する野菊と異也。尤葉莖皆細小。花元より黃色なり。京都東山菊ヶ溪の。菊に似たれども。それよりも。猶

斷枝片葉(其六十)

細小にて別種なり。此菊崎陽の山野に多くあり。云々」デアル、圖ガ添フテキルガ然シ此圖ハ不幸ニシテ眞ヲ誤ツテアリ即チ畫工ガ妄リニよい加減ナ描キ方ヲシタモノデ此ンナ葉ノ黃色菊ハ斷ジテ何處ニモ無ク「崎陽の山野に多くあ」ル者ハ普通分裂葉ノあぶらぎくノミデアル事ハ實地ヲ檢分スレバ直グ分ル、サテあぶらぎくノ名ハ上ノいさざつカラ出タ譯ダカラ此名ハ前記ノ *Chrysanthemum indicum* L. ノ和名デナケレバナラヌ、今日植物學者ノ謂ツテキルあぶらぎく即チ *Chrysanthemum lavandulaefolium* Makino. ハ偽物デ其本物デナイカラ私ハ曾テ之レヲあはこがねぎく(泡黃金菊デ泡トハ其花ガ泡立チテ咲テキルカラノ見立、黃金菊トハ花ガ黃色ナカラデアル)ト改稱シテオイタ、須ラクあぶらぎくト呼ベキ上ノ *Ch. indicum* L. ヲしまかえきくダノはまかえきくだノト稱フルノハ實際ニ即セヌ惡稱デ是レハ廢シテ不可ナキモノデアル、即チ此稱ノ起リハ明治十年前後頃ニ其菊ヲ中國内海ノ或ル島カラ持テ來タト稱シテ其レガ東京ノ小石川植物園ニ栽エラレ島カラ來タトノ理由デしまかえきくト呼バレテキテ其稱呼ヘ後ニはまかえきくノ副稱ガ出來今日ニ及ンダモノデアルガ然シ此きくハ餘リ海島ニハ無クシテ主トシテ陸地產ノモノナレバ之レヲ島ダノ濱ダノト呼ブノハ少シモ實際ニ嵌ツテキナイカラ私ハ此きくガ島カ濱カニ限ツタ *Littoral plant* 即チ海邊生ノ植物デアルカノ様ニ聞ユル此惑ヲカシイ不純ノ名デ本品ヲ呼ブ事ヲ欲シナイノデ今後ハ此種ヲ斷然トあぶらぎくト呼ブ事ニスル ●さゆりノ語原 今カラ百五十八年前ノ安永三年甲午十一月ニ浪華ニテ出版セル『幽遠隨筆』卷ノ下ニ「さゆりは小百合にはあらずさ月にさかりなる物なれば名付たるなり」トアル、さ月ハ早月デ早苗月ヲ略シタモノ、又早月トモ書イテアル即チ陰曆ノ五月デアル ●濱萩 同書ニ「諺に難波の芦は伊勢の濱萩といへるは救済の連歌の句よりいへるなるべし

前句 草の名も所によてかはるなり

難波のあしは伊勢の濱萩 救済

筑玖波集にあり」トアル

●かきつばたノ語原

荒木田久老ノ著セル『楓の落葉信濃漫録』(今カラ百十

一年前ノ文政四年出版)ニ「かきつばた 波太波奈の通ふ言につきて因に云、かきつばたといふ花の名は、燕の

翹る形に似たれば、翹燕花といふ言ぞと、荷田大人のいはれしよし、師の冠辭考に見えたるを、めでたき考と

おもひをりしに、近ごろ按ば、是は燕子花とある漢字よりおもひよせられしものなり、熟考るに、萬葉七に墨

吉之淺澤小野乃加吉都播多衣爾須里着將衣日不知毛、又同卷に、かきつばた衣に摺つけますらの服曾比獵す

る月は來にけり、とありて、上古は今のごとく、染汁を製りて衣服を染ることはなくて、榛の實或はすみれ、か

きつばたなどの色よき物を、衣に摺り着てあやをなせるなり。其摺着をまたかきつくともいひて、是も卷七に

眞鳥住卯手の神社の菅の實を衣に書付令服兒欲得、とあれば、かきつばたは書付花也、上にはたと通ふは、着をつ

とのみいふも古語也。つき、つく、つけなどいふきも、くも、けも、用言に添ふる言にて、元來つの一言ぞ着

の意なりける。船のつく所を津といふにて知るべし。」トアツテ誠ニ其語原ヲ明ニシテヲリ大ニ信賴スル

ニ足ル説デかきつばたノ語原ハ正ニ斯ノ如ク承認シテ可イト信ズル、因ニ云フ從來カラかきつばたヲ漢名デ燕

子花ト云フト我邦ノ先輩ハ定メテキルガ私ハ之レニハ賛成シナイ、即チ此燕子花ハ『溪蠻叢笑』ニ「紫花類燕子

一枝數葩有碧者又有黑色者云々」カラ出タモノデ此レハ蓋シ飛燕草屬ノ *Delphinium grandiflorum* L. (支那デ翠

雀花又ハ小草鳥ノ名ガアル) カ或ハ其同屬ノ他種ノ者ヲ指シテキルナラント思フ、然シ此説ハ從來尙ホ未ダ誰

レモ唱道シタ事ハ無ケレドモ私ハ私ノ此意見ハ多分中ツテキルデアラウヤウナ氣ガスル

●大村胡椒

おほむらごせうハあをもじ即チ *Lindera citriodora* Hemsl. ノ事デ肥前デハせうがのきト稱スル、大村ハ肥前東

彼杵郡大村デ此樹ガ此邊ニモ生ジテキルノデ其地名ガ冠セラレこせう即チ胡椒ハ其佳香アル果實ノ味ガ辛イカ

ラサウ云フノデアアル、伊藤篤太郎博士編輯デ明治十五年四月ニ出版セラレタ『錦窠翁耄筵誌』(錦窠ハ伊藤圭介

先生ノ號)品物之部一ニ此樹ノ寫生圖ニ伴フテ圭介先生自筆ノ文ガ載ツテキル、即チ「肥前大郡ニ産ス、又筑前

斷枝片葉(其六十)

等ニモアリ、樟科ニ屬シ、樹皮ヲ削レバ香氣アリテ、クロモジ又シロモジノ類ニ同ジ、幹枝暗緑ズイナノキノ色ニ似タリ、二月新葉ニ先ツテ花ヲ着クソノ梗勾リテ下垂シ、枝上ニ攢簇ス、他ノ樟科ニ比スレバ、稍觀ルベキガ如シ、白苞四片アリ、六瓣モ亦白ク、九雄藥黃葯、一雌藥ニシテ蜜槽六アリ、又雌本アリ、圓實ヲ結ブ味辛シ」デアアル、此樹ハ落葉木デ九州ニ産スレドモ四國中國方面ニハ之レヲ見ナイ、此圖中ニアル竹齋ハ加藤竹齋ト云フ畫工ノ號デ明治初年ノ頃ニ小石川植物園ニ雇ハレ草木ヲ寫生シテキタ人デアアルガ今ハ疾クニ故人トナツタ(同氏ノ著書ニ『丹青秘錄』ト題スル一冊ノ書ガアル、即チ繪事ヲ説イタ小冊子デ明治十七年三月ニ東京デ出版シタモノデアアル)、右圖傍ノアヲモジ等ノ字ハ圭介先生ノ筆蹟デアアル

●くさとべら

小笠原島ニ

産スル本品ヘ始メテくさとべらノ名ヲ下シタノハ賀來飛霞ト云フ九州豊後出身デ東京ニ出デ小石川植物園ニ明治初期ニ奉職シテキタ植物學者デアアル、其記文ト圖トガ前條ニ記セル『錦窠翁叢書』品物之部一ニ載ツテキルノデ今參考ノ爲メ此ニ抄出シ其當時ヲ偲ブ事ニスル、「くさとべら」新名 草犀科 小笠原島ニ自生スル灌木類ノ常綠品ナリ該島ニテソノ高サ五六尺枝葉互生シ葉ハ枝頂ニ攢簇シ柄無ク形倒卵圓稍々長ク滑澤ニシテ厚シ秋月葉腋ニ花梗ヲ抽キ小梗ヲ分チ白花ヲ着ク萼ハ五裂披針狀ニシテ瓣亦五裂鋸緣ヲナシ一邊ニ並列シ形半邊蓮花ノ如クソノ本ハ筒様ニシテ五雄藥アリソノ筒ノ裂口ヨリ一雌藥勾リテ露出ス後實ヲ結ブ卵圓ソノ頂ニ萼ヲ殘セリ」是ニ由テ之レヲ觀レバ此くさとべらノ和名ハ賀來飛霞氏ニ依テ始メテ命ゼラレタモデアアル事ガ知ラル、

○正誤

●第二號

- 第一ノ口繪下段
(55)頁、一行、
(75)頁、六行、
(79)頁、五行、
(80)頁、十一行、
(103)頁、九行、
- Baton
其前述ノ其ヲ削ル
ほうぶら
Malayalaun
FRAN. フ
FRANCH.
廣ハ廣

●第三號

(153)頁、八行、正月裏ニハ正月ニ裏

●第六號

表紙、目錄、
(251b)
植物採集行進曲ニの歌ヲ加フ
植物採集行進曲ニの歌ヲ加フ
植物採集行進曲ニの歌ヲ加フ
植物採集行進曲ニの歌ヲ加フ